

れきみんミュージアムノート

— Rekimin Museum Note —



Vol.3 「埼玉の旧石器時代と横田遺跡」

よこた



はじめに

現在の埼玉県域に、われわれ人類が暮らし始めたのはいつごろでしょうか？遺跡から出土した炭化物等の科学的な分析から、今からおよそ3万5千年前と考えられています。このような人類の歴史の一番初めの時代を「旧石器時代」といいます。何万年という年月のなかでは気候も大きく変化しました。極寒の氷期と、比較的暖かい間氷期が交互に訪れ、およそ2万5千年～2万年前には最後の氷期の最寒冷期をむかえました。海水面は現在より約120m前後も低下し、瀬戸内海や東京湾は陸地となりました。今とはまったく異なる厳しい環境の中で、人々は定住せず、遊動生活を営んでいました。旧石器時代には、まだ土器は利用されていませんし、また日本の土壌は酸性のため、木や骨など腐りやすい有機物は残りませんので、発見される遺物は石器のみです。

1 埼玉県域における旧石器時代

このような旧石器時代に関する遺跡は、現在までに全国で1万ヶ所以上発見されており、埼玉県内でも700以上の「文化層」が確認されています（日本旧石器学会2010）。「文化層」とは、1つの地層から発見された石器のまとまりを指します。たとえば、ある遺跡において、異なる2つの深さの地層から、それぞれに石器のまとまりが発見された場合、1つの遺跡に2つの文化層が存在する、ということになります。そして、これら2つの文化層が残された時期には、前後関係があると考えます。この石器のまとまり（＝石器群）が残された順序について、ひとつひとつ丁寧に整理していくと、「編年」という歴史的な枠組みができ上が

ります。旧石器時代の研究も歴史学の一部ですので、石器群の「編年」を構築する作業はとても重要です。そのため、「文化層」といった、少し分かりづらい考え方をしています。

さて、長きにわたる旧石器時代ですので、時期によって人々が使用した道具にも違いがありました。そして、埼玉県域から出土した石器からも、それら道具の変遷をたどることができます。たとえば、最も古い時期には、「局部磨製石斧」という刃部の一部が研磨された石器が使用され、これは寄居町の末野遺跡から出土しています。また、さいたま市清河寺前原遺跡においては、石器群が環状を呈する「環状ブロック群」という特徴的な石器分布が認められています。その後、鴻巣市新屋敷遺跡や、鶴ヶ島市西久保遺跡などから出土したような「ナイフ形石器」という利器が使用されるようになりました。

そして、旧石器時代の終末期に誕生したのが「細石器」です。これは、幅1cmに満たないカミソリの刃のような「細石刃」という石器を複数組み合わせ、「植刃器」という槍状の道具として使用したと考えられています。



【植刃器（模型）】

この模型は木製ですが、実際は動物の骨や角で軸が作られることが多いと考えられています。

細石刃を伴う石器群は、埼玉県域からも複数確認されています。県指定有形文化財である深谷市百草遺跡の石器が有名ですが、ここでは鶴ヶ島市の横田遺跡から出土した石器を紹介いたします。

2 横田遺跡の細石刃製作技術

横田遺跡は埼玉県鶴ヶ島市大字三ツ木に所在します。圏央道の建設に伴い、平成3年度から平成5年度まで発掘調査が行われました。現在は、カインズ鶴ヶ島店の南東に位置しています。発掘調査の結果、第Ⅲ層を中心に、17か所の石器集中部と4か所の礫群が確認され、総計4,409点の石器が出土しました。なかでも、すべて黒曜石でつくられた細石刃174点と、細石刃核（細石刃を剥離したあとの原石の核の部分）11点が注目されました。細石刃は、幅約0.5cm前後、長さ約1.6cm（完形品）で、比較的湾曲が少ない印象です。また、側縁部に二次的な加工が認められるものが33点と、全体の2割程度を占め、道具として利用された可能性が考えられます。細石刃核は高さ約5cm以内、幅2.5～3cm程度のものが多く、細石刃を剥離した面（作業面といいます）側などから、製作のための調整加工が施されています。くわえて、側面や背面に原礫面（自然面）を残しているものが多くみられ、それらはいずれもほぼ平らな形をしています。

さらに、横田遺跡からは、細石刃を剥離する前の段階の石器である「ブランク」の接合資料も発見されており、大変興味深いです。この接合資料は、長さ約7.5cm、幅約3.3cmで、厚みのある剥片などが8点ほど接合し、六角柱状の黒曜石に復元されます。この厚みのある剥片が「ブランク」と考えられ、すなわち、黒曜石の原石をいくつか分割することにより、細石刃の原料となる石をつくったということが推測できます。そして、やはりこの原石にも、細石刃核と同様に、全面に平らな原礫面が認められます。

では、この黒曜石はどこから運びこまれたのでしょうか？

3 黒曜石の持ち込み

黒曜石は、蛍光X線分析による元素組成の測定により、その産出地を推定することができます。

1997年に望月明彦氏らにより行われた同分析により、横田遺跡出土の黒曜石製石器は、ほぼ全てが長野県の中部高地における黒曜石原産地（和田峠、霧ヶ峰など）ということが判明しました。これら黒曜石の原産地と横田遺跡は、直線距離でも100km以上離れています。交通手段が発達した現代でも大変な移動距離ですが、旧石器時代人は「良質な」黒曜石を求めて、はるか中部高地まで訪れたのでしょうか。

おわりに

旧石器時代研究の魅力は、とても小さな石器から、非常にダイナミックな人々の動きがわかることだと思います。現在よりもはるかに厳しい環境のなか、日本列島をたえず移動していた人々は、我々と同じホモ・サピエンスです。彼ら彼女らの苦勞(?)に共感しつつ、石器製作技術の高さに感動することもあります。見るだけでは分かりづらい旧石器時代の石器の魅力について、これからもご紹介してまいります。

（企画・学習支援担当 尾崎 沙羅）

参考文献

- 田中英司1995『鶴ヶ島市横田遺跡』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 堤隆2020『ビジュアル版旧石器時代ガイドブック』新泉社
- 日本旧石器学会2010『日本列島の旧石器時代遺跡-日本旧石器（先土器・岩宿）時代遺跡のデータベース-』
- 望月明彦・天野風人1997「蛍光X線分析による横田遺跡出土の黒曜石製石器の産地推定」『埼玉考古別冊5号』埼玉考古学会